

## カンペ編『点検書』の成立過程に関する考察

塩津英樹

(2010年10月7日受理)

### A Study on Campe's Editing Process of *Revisionswerk*

Hideki Shiozu

**Abstract:** This paper aims to examine the overall concept 'Philanthropen'. 'Philanthropen' have been taken for granted so far that they were Campe, Trapp, Salzmann who worked for Basedow's Philanthropinum. 'Gesellschaft praktischer Erzieher' founded by Campe is featured in this paper as clues to examine the concept 'Philanthropen'. In the editing process of *Revisionswerk*, 'Gesellschaft praktischer Erzieher' expressed their common opinion by complying with 'eight working contents'. Commentaries of *Revisionswerk* played a big role in addition to 'eight working contents'. Commentaries were considered to be a complementary means to express opinions of 'Gesellschaft praktischer Erzieher'. However, the commentaries should be considered to be the means of free communication among 'Gesellschaft praktischer Erzieher' to respect the original ideas of each. 'Gesellschaft praktischer Erzieher' admitted Locke and Rousseau as collaborators and had the cooperation of people who were not specialized for pedagogy. Therefore, 'Gesellschaft praktischer Erzieher' needs to be distinguished from 'Philanthropen' definitely.

Key words: Campe, Philanthropen, Gesellschaft praktischer Erzieher, *Revisionswerk*, Commentaries

キーワード：カンペ，汎愛派，実践的教育者の会，点検書，注釈

### I. はじめに

近年、近代教育学を再考する手掛かりとして、啓蒙主義の教育学が注目されている。例えば森川は、「近代固有の論理を解明する」ことによって、「一八世紀近代の教育学全体を再評価する」ことを意図している<sup>1)</sup>。森川は、ベスタロッターの「メトード」の成立を、近代教育学成立のための重要な契機と見做しているが、ベスタロッターと同時代に属する「汎愛派」にも目を配ることで、近代教育学の重層性を捉えようとしているように思われる。

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：坂越正樹（主任指導教員）、安原義仁、古賀一博、丸山恭司

一般的に「教育の世紀」と呼ばれる18世紀には、ベスタロッターを始めとして、数多くの教育思想家が活躍した。その中であって、ロックやルソーの思想的影響を受けながら、独自の教育活動を展開したのが「汎愛派」と呼ばれる一派である。

では「汎愛派」とはいかなる集団であったと言えるのであろうか。このことは必ずしも明確にはなっていない。確かに教育史の教科書には、明確に特徴付けがなされている。「汎愛派」と言えば、直ちにその代表的人物であるバゼドウの名前が想起される。バゼドウはロックやルソーの思想的影響を受けつつ、1774年に、ドイツ中部のデッサウの地に汎愛学院(1774～1793年)を設立した。このデッサウの汎愛学院に関与していたのがカンペ、トラップ、ザルツマンといった「汎愛派」を代表する人々であった。その後、トラップは1779年にハレ大学で教育学の正教授となり、またザルツマン

は、1784年に、ゴータ近郊にシュネッペンタールの汎愛学院を設立した。さらにカンペは、デッサウを去ってハンブルクへと移り、同地で著作活動に専念した。「汎愛派」に対する一般的理解は、このような人々の活動に集約されていると言えるのではないだろうか。しかし、汎愛学院に関わったという事実以上に、彼らを一括りにする原理は必ずしも明確ではないのである。

しかし近年、「汎愛派」に関する個別研究が進む中で、バゼドウの後継者世代が目されるようになってきた。バゼドウの後継者世代とは、上述のカンペ、トラップ、ザルツマンといった人々を指し、なかでもカンペが、その中心的存在であると言われる。ケルスティング(1992年)、森川(2010年)の指摘によれば、最近のドイツにおける研究、とくに旧東ドイツからの新しい資料に基づいた新たな研究などから、「汎愛主義教育学」の見直しが求められているという。すなわち、カンペ、トラップ、ザルツマンといった人々が、「汎愛派」の教育学理論を独自に発展させたと考えられ、その成果が『実践的教育者の会による教育に関する普遍的点検』<sup>2)</sup>(以下、『点検書』と略記)であるとされる<sup>3)</sup>。『点検書』は、カンペを編集責任者として、1785年から1792年にかけて出版された全16巻から成る著書である。また同著は、「汎愛派」の教育学の集大成と見做され、「汎愛派」の教育学理論の特異性を解明するための手掛かりと見做されてきた。

しかしここで留意すべきことは、『点検書』の編集にバゼドウが関与していないことである。上述したように、「汎愛派」とは、デッサウの汎愛学院の設立者であるバゼドウ、そして汎愛学院に関与したカンペ、トラップ、ザルツマンといった人々を指す呼称であった。この事実を顧慮するならば、『点検書』の編集にバゼドウが関与していない以上、『点検書』が「汎愛派」によって編集されたという理解の仕方には問題があるだろう。『点検書』は「実践的教育者の会」によって編集されたのであり、そして事実、バゼドウは「実践的教育者の会」の会員ではなかった。客観的事実として確認できることは、「汎愛派」と呼ばれたカンペ、トラップ、ザルツマンといった人々が「実践的教育者の会」の一員であったということだけである。にもかかわらず、この事実を十分に踏まえることなく、「汎愛派」と「実践的教育者の会」を明確に区別しないところに先行研究の問題がある。

では「実践的教育者の会」とは如何なる組織であり、また如何なる背景のもとで結成されたのであろうか。この問いに答えるために、本稿では『点検書』の成立過程に注目した。なぜなら「実践的教育者の会」という組織は、『点検書』を編集するためにカンペが中心

となって作り上げた組織だからである。とりわけ本稿では、『点検書』(第1巻)に記されたカンペの序言に注目し、『点検書』の成立過程を明らかにするための手掛かりとした。序言は、1784年9月1日に、ホルシュタインのトリットアウで書かれたものであり、序言には、「実践的教育者の会」による『点検書』の編集計画が示されている。ケルスティング(1992年、1996年)、森川(2010年)は『点検書』の成立過程について考察するなかで、「実践的教育者の会」が有する集団的特性を明らかにしているものの、「汎愛派」と「実践的教育者の会」の差異性にまで考察を進めることができていないように思われる。

したがって本稿では、カンペの序言を手掛かりに、『点検書』の成立過程について考察することで、「汎愛派」と「実践的教育者の会」の差異性について明らかにする。同試みによって、「汎愛派」という集団を再考する。

## Ⅱ. カンペと「実践的教育者の会」

### 1. 序言に見るカンペの意図

本節では、『点検書』(第1巻)の序言を分析することで、『点検書』の編集背景を明らかにする。すでにカンペは、1783年以降、当時の啓蒙雑誌である「ベルリン月報」<sup>4)</sup>において、『点検書』の計画を公表していた。『点検書』の序言は、その後書かれたものである。カンペは、『点検書』の編集に関して、編集作業がある特定の個人の手によってなされるのではなく、可能な限り多くの人々の手によってなされることを期待した。それも「ドイツ内外の多くの好意的な参加者の協力によって行われる」<sup>5)</sup>ことを期待した。そしてこの期待はカンペの努力によって現実のものとなったのである。「我々の時代の実践的な教育哲学者のなかで、最も聡明な頭脳の持ち主たちを、共同の計画的実行へと向けて一体化させることに私は成功したのである。」<sup>6)</sup>

ではなぜ、多くの人々による共同の計画的実行が必要とされたのであろうか。カンペによれば、当時のドイツは、「教育事情における一般的騒乱」の最中であったという。「教育の世紀」と呼ばれる状況は、様々な教育言説を生み出したと言われ、そのことが結果的に思想的混乱を招いていたのである。しかしカンペは、このような状況を、必ずしも否定的に捉えていたわけではなかった。カンペは思想的混乱の内に「より良い卓越した結果」を見出していたのである。ところが人々は、そのことに気付いてはいなかった。カンペは、その点を問題視したのである。「人は、古い教育方法の特異な誤りを見通したことによって、ときおり、健全

で善良な穀物の粒を、埃だらけのもみ殻とともに拒否した。』<sup>7)</sup> 人々は、「非難すべきもの」と「類まれな理想」とを混同したのである。「父親、母親、そしてかけ出しの教師は、多数の教育書によって、そして教育書の中で支配的となっている諸原則と方法の相違によって混乱させられている。かけ出しの教師は、自ら採用すべきもの、あるいは拒否すべきものの大部分が、もはや分からないのである。<sup>8)</sup>「ただ、このような役に立つ材料は、依然として、体系的な秩序もなく、瓦礫やごみと混ざり合っており、乱雑に重なり合っており、横たわっているのである!」<sup>9)</sup>

こうした状況下で、カンペは、当時のドイツにおいて欠けているのは、個人の力ではなく、才能ある人々がお互いに協力し合うことであると認識した。「共同で吟味され、正当と認められた計画に従って、一体化された諸力でもって、このような資料を選び出し、整えて、分類して、組み立てて、そこから望ましい建造物を築く、経験豊かで、思慮分別のある、器用な建築家たちの協力が欠けていたのである。<sup>10)</sup>このような認識から、カンペは才能ある人々の協力を呼びかけたのである。

## 2. カンペと「実践的教育者」

カンペは、当時、ドイツ各地に存在していた教育の専門家に視線を向けていた。「私は、あたり一面に視線を向けた。私の眼差しは、数多くの哲学的で、観察力のある、そして執行力のある経験豊かな教育者に注がれていたのである。その教育者とは、我々の祖国が自慢できるような人々であり、その一人ひとりが別の人の提示した教育に関する資料を整えることのできる人々であり、あるいは別の人が取り壊してしまった大きな建造物の一部を築き上げることのできる人々である。<sup>11)</sup>カンペは、経験豊かな教育者を探し出し、彼らと一緒に論じ合い、共同で計画を練ることを考えていた。「協力者が互いにあらゆる方法で友好的に助け合うこと」、また計画の中核部分の構想が、「協力者全員の一致した善良な判断」によって行われること。このことが実現される時、「我々のドイツの地において」、また「このような領域（教育の領域）において」、如何なる時代にも、また如何なる国にも、類を見ない著書（『点検書』）が生み出されるのである<sup>12)</sup>。

カンペは、『点検書』の構想が芽生えた時の気持ちを次のように書き記している。「私は、20年という月日のかんりの部分を、心配でたまらない教育の仕事に捧げた後、かの考えの実現にとって妨げとなっている障害を克服することに、残りの健康と力を使おうと強く思っていた。<sup>13)</sup>カンペは、これまで数多くの教育実践に従事してきた。大学で神学の研究を終えた後、

数年間はフンボルト兄弟の家庭教師として働き、また11カ月という短い期間ではあったが、デッサウにおいてバゼドウとともに汎愛学院の管理にあたった。その後、ハンブルクへと移転した後も、デッサウでの教育経験を背景にして、ハンブルクの商人家族の子どもの教育に取り組み、ハンブルク近郊（Hammerdeich）に教育施設を設立して、1783年まで運営していた<sup>14)</sup>。

以上のような教育経験を経て、カンペはハンブルクからトリットウへと移り、同地において、『点検書』の構想を練った。この時すでに、カンペは国家主導の教育改革という期待を放棄していた。「怠惰で、もしかすると見込みのない期待の中で、好機が訪れるのを待つ代わりに、とにかくドイツという国にとって、最も重要で緊急の国家的必要性へと真剣に目を開き、そして改革を志した教育者と教師の協会が、我々の時代に相応しい教育の形を作り上げるために招聘されて、雇われる時、私は分散された私的な力が、公的支援がなくともできることを、やってみようと思ったのである。<sup>15)</sup>ケルスティンクは、『点検書』について次のように考察している。「『点検書』の出版は、大学の外側で、また国家的な庇護を受けることもなく、教育学の体系を基礎付けて、教育学に専門的・職業的な『神聖性』を付与しようとする試みであった。<sup>16)</sup>カンペは、個々の分散した力を集結させるために、多くの人々を訪ね、彼らに自身の構想した暫定的な見取り図を提示することによって協力を要請した。そして協力者の認識、経験、力と巧みさの一つにしてくれるよう要請して、完全な「教育組織と教授組織（Erziehungs und Unterweisungssystem）」を完成させようとした。カンペによれば、こうした試みが、同時代人と後世の人々に対する最も重要な貢献になるのだという<sup>17)</sup>。

## 3. 「実践的教育者の会」と「8つの業務内容」

上述のように、カンペは、才能ある人々の協力を要請し、その結果として「実践的教育者の会」が成立した。「実践的教育者の会」の成立は、カンペにとって十分に納得のいく結果であった。「結果は、私の期待に完全にかなうものであった。私が多くの意見を聞いた人々は、私にとって非常に喜ばしい賛成でもって、私の願いと計画に敬意を表したのである。<sup>18)</sup>このように述べながら、カンペは協力者の存在を読者に知ってもらうために、「実践的教育者」一人ひとりの名前と身分を紹介することにした。「実践的教育者」は、「正規会員」と「臨時会員」に分けられ、「正規会員」は、あらゆる活動に関与し、「臨時会員」は、計画の特定部分に関与することになっていた<sup>19)</sup>。「正規会員」は11人から成り<sup>20)</sup>、また「臨時会員」は15人から成っていた<sup>21)</sup>。

会員の中には、「汎愛派」としてよく知られているトラップ、ザルツマンといった人々の名前を確認することができる。このような会員が中心となって『点検書』の編集作業が行われたが、会員以外も見過ごされてはならない。例えば「実践的教育者の会」の会員以外では、医師であるウンツァーとウーデンが『点検書』の第3巻に、それぞれ1本ずつ論文を寄稿している。「妊婦の食養生法」(ウンツァー)と「乳母の食養生法」(ウーデン)である。カンベは『点検書』第3巻の仮報告のなかで、この2つの医学的内容の論文を、「我々の信頼を受けるに値する2人の定評ある医者、著述家によるもの」<sup>22)</sup>として紹介している。ケルスティングによれば、「点検者は、自らの専門的限界も心得ていた」という。「実践的教育者の会」の構成員は、十分な医学的知識を有してはいなかった。それゆえ点検者は、ウンツァーとウーデンの論文に対しては如何なる注釈も付さなかったのである。カンベは、教育学分野以外からの協力も得ることで、『点検書』の科学的性格を強化しようとしていたのである<sup>23)</sup>。

さらにカンベは、『点検書』の編集方針に関しても、「正規会員」と「臨時会員」が従事すべき「8つの業務内容」を設けていた。それは以下のようなものである<sup>24)</sup>。

(1) 協会のすべての会員は、編纂に関して、その大部分を解決するだけの力があると感じる領域を選択すること。

(2) これに続いて、すべての会員は、他の会員によってなされたことを最も慎重な態度で検査すること。会員が準備した良いものと役に立つものを集めること。会員固有の経験、観察そして認識を付け加えること。会員の精神を、しばらくの間、母親のような温かさでもって見守ること。会員が自身の力を大いに発揮して、完全なものを生み出すことが出来るようにすること。

(3) すべての会員の作品は、協会のすべての正規会員<sup>25)</sup>へと、紙をとじ込んだ、読みやすい手書き原稿で送付すること。そして(それを受け取った)すべての正規会員は、注釈、修正、改良を書き添えること。

(4) 作品の執筆者は、会員の最良の認識に応じて、注釈と修正を誠実に役立てて、作品に加えるようにすること。

(5) 執筆者が修正の必要性を感じない部分については、訂正者と文通を行うこと。一方が他方を納得させ

るか、あるいはどちらかが納得させられること。この際に、読者は、一方の側にも、他方の側にも立つことができない状態にある。一方が、また会員の相当数が反対しないことを条件に、異議を唱えられた意見はそのまま残しておくこと。会員は、反論を注釈に付け加えて、論争を先延ばしにすること。

(6) 協会の大部分の会員によって満場一致で正当と認められたもの以外は、決して受け入れられないこと。

(7) 協会の大部分の声を一つにまとめることのできなかったあらゆるものは、『点検書』の中にある、問題ある思想を賛否の根拠とともに含む部分<sup>26)</sup>へと差し戻されること。

(8) あらゆる正規会員は、その度ごとに送付されてくる手書き原稿に親切に取りかかること。いつも可能な限り早く通読して、注釈によって豊かにして、次の会員に送付すること。

「実践的教育者の会」は、上述の「8つの業務内容」を遵守することで、会員同士のコンセンサスを確保していた。なかでも会員が注釈を付すという行為は、会員の思想的立場を明確にするという意味だけでなく、争点となっている部分の判断を読者に委ねるという役割をも担っているように思われる。いずれにせよ、「実践的教育者の会」は、会員同士の社会的身分の差に囚われない自由なコミュニケーション空間を成立させている。そしてそのために重要な役割を果たしていたのが注釈であった。

#### 4. 『点検書』における注釈の意義

上述の「8つの業務内容」からも明らかのように、『点検書』の編集の際には、会員が原稿に注釈を付すという形で、会員同士のコンセンサスを確保していた。しかし、これまで注釈は、その存在が指摘されつつも、その重要性は看過されてきた傾向にある。確かに『点検書』に収録されたロックの『教育論』とルソーの『エミール』に付された膨大な数の注釈が取り上げられたことはある。しかしカンベは、ロックとルソーの著書を、あくまで「付録」として『点検書』に収録することを明言したがゆえに、両著に付された注釈もまた、「付録」のようなものとして看過されがちであった<sup>27)</sup>。しかし実際には、膨大な数の注釈には、会員固有の思想が示されており、「付録」の域を超えた主張にすらなっているのである。

『点検書』の第9巻に収録された『教育論』は612頁から成るが、そこには400以上もの注釈が付されている。

る。注釈者は、シュトゥーフエ、レーゼヴィッツ、カンペ、コステ、フンク、ザルツマン、ゲディケ、翻訳者(D. Uebers.)、トラップ、編集者(D. Herausgeber.)である。このうちシュトゥーフエ、レーゼヴィッツ、フンク、ゲディケ、トラップの5人が「正規会員」であり、ザルツマンは「臨時会員」であった。また『点検書』の第12巻から第15巻にかけて収録された『エミール』の注釈者は、カンペ、エーラーズ、ホイジンガ、レーゼヴィッツ、シュトゥーフエ、トラップであり、エーラーズ、レーゼヴィッツ、シュトゥーフエ、トラップの4人が「正規会員」であった。

さらに注釈の重要性を確認できるものとして、『教育論』と『エミール』以外では、『点検書』の第7巻に収録されたトラップの論文を挙げることができる。トラップの論文「教育学の観点における古代の古典作家と古典語の研究について」は、76頁から成る比較的短い論文であるが、同論文には、「実践的教育者の会」の会員によって、169頁にわたって注釈が付された。注釈者はゲディケ、ブッシュ、エーラーズ、レーゼヴィッツ、フンク、カンペ、ヴィヨーム、フィッシャーの8人であり、ゲディケ、ブッシュ、エーラーズ、レーゼヴィッツ、フンク、ヴィヨーム、フィッシャーの7人が「正規会員」であった。以上のように、注釈は、単に「付録」のようなものではなく、会員にとって重要なコミュニケーション手段なのである。

### Ⅲ. 『点検書』の計画

#### 1. 「理論編」と「実践編」

『点検書』は、「理論編」と「実践編」に分けられており、「理論編」には45のテーマが予定されている。45のテーマの内容は非常に多岐にわたり、懸賞課題を含めて詳細に示されている。とりわけ前半部(1～8番)には、教育の目的や様々な教育(身体教育や魂の教育)の諸原則が示される。そして誤った既存の教育に対する批判や時代の流行病に対する警告(9～20番)が行われ、さらに体育や遊戯、様々な授業(21～31番)の実際が検討される。それ以降は、様々な社会的身分に応じた教育(32～36番)、そして家庭教育、公教育、孤児院の教育、国家と教育の関係、というように教育制度に関するテーマ(37～44番)が予定され、最後の45番目にはロックの『教育論』とルソーの『エミール』のドイツ語翻訳が予告されていた。「……二つの著書の翻訳作業は、私たちの完全な協会のもとでの共同の検査によって行われる。私は、教育的で有益な結果になるとしか考えることができない。ロックの教育書(『教育論』)もルソーの『エミール』も、器用な手によっ

て新しく翻訳されるだろう。翻訳は、『点検書』の他の部分と同じように、あらゆる正規会員に手書き原稿で送付される。そして(原稿を受け取った)正規会員は、修正、改良、解説を加えた注釈を追加するのである。」<sup>28)</sup>そして「正規会員」によって付された注釈は、「貴重なコメント」として、ドイツ語に翻訳された本文とともに印刷されることになったのである。

「実践編」には、「理論編」のようなテーマは存在せず、ただ次のように記されている。「もし若者が、仕事生活へと入っていくか、あるいは大学での研究を始めるつもりならば、実践編は、初めの基本から、若者が教養ある状態に到達するまでの、すべての学校授業のあらゆる部分に関する教科書の計画的シリーズを含む予定である。」<sup>29)</sup>このカンペの言葉を理解するために、少し背景的なことについて補足しておきたい。1785年に、『点検書』の第1巻が発行された後、カンペは、ブラウンシュヴァイク＝ヴォルフエンビュッテル侯国に招聘され、同地において学校制度の改革に従事した。同地において、カンペは、自身の同志であるシュトゥーフエ、トラップとともに、ブラウンシュヴァイクの学務官という立場で、「すべての学校制度を、教会の監督から解放して、国家による監督へと移行させること」を委託されたと言われる<sup>30)</sup>。このようなカンペの改革努力は、1787年には、教会や領邦等族の抵抗にあって失敗に終わったものの、近代の学校改革の端緒として評価されるという。さらにカンペの成果として挙げられるのは、ブラウンシュヴァイク侯爵の財政的支援とともに設立した教科書書店であった。備え付けの印刷所において、1789年から1799年の間に、おおよそ500,000冊の書籍、パンフレットそして定期刊行物が印刷されたと言われる。このような仕事の多くに、カンペは、執筆者として、また編集責任者として関与した。教科書書店の設立によって、博愛主義的な活動の中心地が、デッサウからブラウンシュヴァイクへと移動したと言われる<sup>31)</sup>。以上のことを踏まえると、カンペが『点検書』の「実践編」において言及した教科書の計画的シリーズの作成とは、カンペが意図した学校制度改革の一部であったと考えられる<sup>32)</sup>。

#### 2. 懸賞課題

上述のように、『点検書』の編集作業は、「8つの業務内容」を通して行われた。しかし実際のところ、会員は、それぞれが抱える本業で多忙であり、時間的余裕のない者も少なくなかった。実際に「理論編」で挙げられたテーマの中には、当初の予定とは異なって、担当予定の者が、急に担当できなくなるという事態も起こっていた。それゆえ会員は、自身の余力の範囲内で取り組むべきテーマを選択していた。その結果、『点

検書』で予定されていたテーマの中には、いつまでも担当者が決まらないものもあった。その担当者の決まらないテーマが懸賞課題とされたのである。「それゆえ私は、著名で誠実な書籍出版業者であり、この著書（『点検書』）の出版業者であるハンプルクのカール＝エルンスト＝ボン氏との連携の中で……いまだ編集を引き受ける執筆者が決まっていない大多数のテーマを懸賞課題としたのである。<sup>33)</sup>そしてカンペは、45のテーマから成る『点検書』の見取り図の中で、「注意書き（NB）」を加えて、シュヴァーバッハ活字体で印刷することによって、懸賞課題のテーマを識別しやすくしたのである。懸賞論文は、執筆者の名前を伏せて、編集者であるカンペのもと（トリットウ）へと送付することになっていた。そしてカンペのもとに届いた懸賞論文は、「実践的教育者の会」の「正規会員」によって査読された。会員の大多数の声によって採用に値すると認められた懸賞論文には賞金が与えられた。1ページ当たり3ドゥカーテンが見積もられて、またアルファベットの懸賞論文に対して与えられた賞金は69ドゥカーテンに達するほどであった<sup>34)</sup>。

懸賞課題の中で、特にカンペが期待していたテーマは、「子どもの誕生の時点から開始され、そして不断に継続されるような、子どもの、すべての気付かれた、身体的かつ精神的変化についての詳細な日記の作成」<sup>35)</sup>であった。カンペは、この日記の作成が心理学者の手によって行われることを期待していた。「もし誠実な心理学者が、このような仕事を引き受けるならば、そこから生じる利益は、言葉に表せないほどに、大きなものであるように思われる。<sup>36)</sup>「そのような注意深い、絶え間ない、不断の子どもの観察が、どれだけ多くの情報を、心理学者と教育者に与えることだろうか！」<sup>37)</sup>カンペは、日記の作成<sup>38)</sup>によって、子どもの内面的発達を考察する手掛かりにしようとした。例えば、同時代人のペスタロッチーもまた、自身の息子についての「ヤーコブ日記」を作成して、子どもの内面的発達に関心を示している。「汎愛派」の教育学は、基礎科学として、当時生成途中の医学や心理学に依拠する部分が多く、このような日記の作成もまた、そのことと関係性がある。「汎愛派」は、教育学の体系化を目指した際に、医学や心理学がもたらす知見を援用しようとしたためである。

### 3. 『点検書』の予約注文

カンペは、『点検書』の刊行に際して、予約注文という形をとっていた。これは、カンペが計画の実現に関して、公衆に期待をかけていたためであろう。「公衆が、我々の公表した計画の実現を望んでいるのかどうか？という問い合わせに対して、我々が、このよう

な多額の費用を伴う著書（『点検書』）の価格を、署名者に対しては、特別に、価格を安く引き下げようとするならば、我々の時代の最も優遇された著書でさえ示さなかったほどの多数の署名が舞い込み、そして事実、必要とされたであろう。<sup>39)</sup>カンペは、計画が公衆の注目を集めていることを踏まえた上で、公衆に対して更なる支援を呼び掛けている。カンペは、計画の実現を神意に負うとともに、公衆にも負うたのである。「それを私はあなたがたに負っているのである。誠実な同時代人に負っているのである。大部分は招かれておらず、そして私との個人的な面識もない、ただあなたがたに生気を与える連帯精神の提案に、この著書（『点検書』）の促進に、関心を抱くあなたがたに負っているのである。<sup>40)</sup>

それゆえカンペは、このような公衆に対して、『点検書』が可能な限り安く、そして早く届けられるべきであると考えていた。「すべての階級のすべての家族に捧げられるべきである著書は、無料か、あるいはとても安い価格で提供されたのである。遠く離れた場所との文通のために、そして費用のかさむ手書き原稿の往復のために、郵送費用も多額となる著書は、もし出版社に対する相当な数の署名によって、相当な売れ行きが確保されるとするならば……安い価格で提供することができたのである。<sup>41)</sup>予約注文があった場合には、予約注文者の名前と職業が、地域別で記載された。原則として、予約注文者の社会的身分は顧慮されることなく、機械的にアルファベット順で並べられているのが特徴である。予約注文は、ドイツ国内に留まらず、アムステルダムやコペンハーゲンといったドイツ国外からもあった。

ドイツ国内外を問わず、様々な社会的身分の者が予約注文をしていることから明らかなように、『点検書』は、必ずしも学識者向けに書かれたものではなく、公衆を意識して書かれたものであったということが理解できる。

## IV. おわりに

本稿は、『点検書』の第1巻に記されたカンペの序言を詳細に分析することによって、『点検書』の成立過程について考察した。カンペは、当時のドイツにおける教育的状況を憂慮して、経験豊かな教育者を集め、「実践的教育者の会」を結成した。「実践的教育者の会」は、本稿で明らかにした「8つの業務内容」を通して、「実践的教育者の会」としての共通見解を示すことを目指していた。その際に重要な役割を果たしたのは、自由なコミュニケーション手段としての注釈である。

これまで注釈は、補足的役割を果たすものと理解されがちであったが、会員一人ひとりの思想的固有性を尊重するための有益な手段として見做されるべきである。

『点検書』の成立過程の考察から明らかになることは、個々の力ではなく、集団の力で教育学の体系化を目指そうとした「実践的教育者の会」の努力の足跡である。カンペを中心とした「実践的教育者の会」の試みは、教育学の体系化を目指した18世紀ドイツの教育学者たちの特異な試みの一つとして評価されるべきものであろう。

また「実践的教育者の会」は、「先駆者」であるロックやルソーを協力者として認め、また教育学分野以外からも多くの協力者を得ていることから、「汎愛派」という集団とは明確に区別される必要があるだろう。今後の課題は、カンペの書簡集を手掛かりに、カンペと他の会員との間で行われた文通内容を分析し、「実践的教育者の会」の全体像をより詳細に検討していくことである。

## 【注】

- 1) 森川直『近代教育学の成立』、東信堂、2010年、10頁。
- 2) Campe, J. H. (Hrsg.): Allgemeine Revision des gesamten Schul- und Erziehungswesens von einer Gesellschaft praktischer Erzieher. Hamburg, Wolfenbüttel, Wien, Braunschweig 1785-1792 (Vaduz/Liechtenstein 1979).
- 3) Kersting, C.: Die Genese der Pädagogik im 18. Jahrhundert: Campes »Allgemeine Revision« im Kontext der neuzeitlichen Wissenschaft. Weinheim 1992., S. 23. 森川 (2010 60頁)
- 4) 「ベルリン月報」とは、ゲディケやピースターといった人々を中心となって刊行されていた18世紀を代表する啓蒙雑誌である。同誌は、メンデルスゾーンの論文「啓蒙するとはどういうことをいうのか?」(1784年9月号)や、当時ケーニヒスベルク大学の哲学教授であったカントの論文「啓蒙とは何か?」(1784年12月号)が収められた雑誌としてもよく知られている。この「ベルリン月報」において、既にカンペは、『点検書』に関する論文を寄稿している。1783年から1796年までの「ベルリン月報」の目録を整理しているシュルツの著書 (Schulz, U.: Die Berlinische Monatsschrift (1783-1796) Eine Bibliographie Mit einer Einleitung von Günter Schulz. Hildesheim 1969.)によれば、カンペは、「ベルリン月報」に4本の論文を寄稿しているが、その

内の3本は『点検書』に関するものであった。

- (1783年7月号)「女性のための寄宿学校設立に関する官房長 Gökinkg 氏の計画について」
- (1783年8月号)「実践的教育者の会による教育に関する普遍的点検の計画」
- (1784年1月号)「企画された全教育制度の点検に関する追加通知」
- (1784年12月号)「実践的教育者の会による教育に関する普遍的点検の進展についての追加通知」
- 5) Campe I, S. III. (『点検書』の引用は、執筆者、巻数、頁数を示す。)
- 6) Campe I, S. IV.
- 7) Campe I, S. VIII.
- 8) Campe I, S. VIII f.
- 9) Campe I, S. IX.
- 10) Campe I, S. IX.
- 11) Campe I, S. X.
- 12) Campe I, S. X.
- 13) Campe I, S. X I.
- 14) Stumpf, H.: Die wichtigsten Pädagogen. Wiesbaden 2007., S. 47f. 既に明らかにされているカンペに関する歴史的事実に関しては、先行研究の知見に依拠しつつ考察を進めた。
- 15) Campe I, S. X I.
- 16) Kersting, C.: J. H. Campes 'Allgemeine Revision' -das Standardwerk der Pädagogik der Aufklärung. In: Visionäre Lebensklugheit: Joachim Heinrich Campe in seiner Zeit (1746-1818). Wiesbaden 1996, S. 180.
- 17) Campe I, S. X I f.
- 18) Campe I, S. X II.
- 19) Campe I, S. X III ff.
- 20) 「正規会員」は以下の11人から成っている。
  - (1) Prof. Büsch (Hamburg)
  - (2) Prof. Ebeling (Hamburg)
  - (3) Prof. Ehlers (Kiel)
  - (4) Rektor Fischer (Halberstadt)
  - (5) Rektor Funk (Magdeburg)
  - (6) oberkonsistorialrat Gedike (Berlin)
  - (7) Prof. Moritz (Berlin)
  - (8) Abt Resewitz (Klosterbergen)
  - (9) Rektor Stuve (Neuruppin)
  - (10) Prof. Trapp (Hamburg)
  - (11) Prediger Villaume (Halberstadt)
 この11人の「正規会員」に、ロックとルソーも協力者として数えられた。
- 21) 「臨時会員」は以下の15人から成っている。

- (1) Dr. K. Fr. Bahrđt (Halle)
  - (2) Prof. Becker (Dresden)
  - (3) Prof. Bolte (Brandenburgischen)
  - (4) Hofrath Brinkmann (Düsseldorf)
  - (5) Prof. Hindenburg (Leipzig)
  - (6) Feldprobst Kletschke (Potsdam)
  - (7) Hofrath Lerse (Colmar)
  - (8) Rektor Lieberkühn (Breslau)
  - (9) Hofrath Pfeffel (Colmar)
  - (10) Ein edler deutscher Prinz
  - (11) Herr Rudolphi (Erzieher/Hamburg)
  - (12) Mslle Rudolphi (Erzieherin/Hamburg)
  - (13) Prof. Salzmann (Schnepfenthal bei Gotha)
  - (14) Prof. Schummel (Liegnitz)
  - (15) Herr Vogel (Lehrer/an Herr Prof. Trapps Erziehungsinstitut)
- しかし「臨時会員」の一人であるパールトは、『点検書』(第1巻)に「教育の目的について」という論文を寄稿した後、自身の時間的余裕のなさから、「実践的教育者の会」を脱退している。
- 22) Campe 3, S. III.
  - 23) Kersting 1992, S. 86.
  - 24) Campe 1, S. X VII-X X.
  - 25) 本来、カンベは、会員の作品を「正規会員」だけでなく「臨時会員」に対しても送付することを意図していた。しかし「臨時会員」の中には、パールトのように離脱する者が少なくなく、結果的に「臨時会員」にまで送付することはできなかった。カンベは、この事実に関して、注釈上で次のように述べている。「もし協会の正規会員だけでなく、臨時会員もまた、その都度の手書き原稿を評価することができていたならば、言うまでもなく、我々の著書のすばらしい完成に役立ったであろうに。」
  - 26) 『点検書』の「理論編」の41番目のテーマ「協会

- の声に分かれた問題のある思想の論究。」を意味していると思われる。
- 27) Campe 1, S. X L VIII.
  - 28) Campe 1, S. X L.
  - 29) Campe 1, S. L.
  - 30) Stumpf 2007 S. X L IX.
  - 31) Stumpf 2007 S. X L IX f.
  - 32) またカンベは、「実践編」において、子どもの教育年数と対象とする子どもについても語っているので補足しておきたい。カンベによれば、研究に従事しない者には、8年間(6歳~14歳、望ましくは7歳~15歳)の授業が理想であり、研究に従事する者には、12年間(6歳~18歳、望ましくは7歳~19歳)の授業が理想であるという。そして対象とする子どもは、「明白な愚か者」や「優れた才能の持ち主」ではなく、「中くらいの能力を有する子ども」を想定する、ということである。主として「汎愛派」は、中産階級の子どもの教育を意図していたと言われ、また時として「市民教育学者」と呼ばれるのは、このような事情による。
  - 33) Campe 1, S. X X II.
  - 34) Campe 1, S. X X II f.
  - 35) Campe 1, S. X X IV.
  - 36) Campe 1, S. X X III.
  - 37) Campe 1, S. X X IV.
  - 38) しかしカンベによれば、このような日記の作成は容易ではない。というのも、日記の作成のためには、常に子どもに寄り添い続ける人と、子どもを観察し、記録する人の、2人の明敏な観察者を必要としたからである。
  - 39) Campe 1, S. IV.
  - 40) Campe 1, S. IV.
  - 41) Campe 1, S. X V.